

## 第 63 回文化ゼミナールに参加して (S. Morino) [J]

2024 年 3 月 13 日から 17 日までの 5 日間、慶應義塾大学日吉キャンパスにて第 63 回文化ゼミナール（以下「文化ゼミ」とする）が開催された。今回は、招待講師であるベルリン・ライプニッツ文化・文学研究所所長のエーファ・ゴイレン (Eva Geulen) 教授のほか、韓国の教員および学生、日本全国の教員、修士・博士課程の学生など、多くの参加者が集った。

私はこの文化ゼミの存在自体は周囲の先輩や先生方から伺っていたが、実際参加するのは今回が初めてであった。ゲーテの形態学というテーマにもとより関心があり参加を決めたものの、発表はドイツ語、議論もドイツ語、一日中ドイツ語という環境に、留学経験もない私は始まる前から縮みあがっていた。そうした恐怖心を抱えながら、私は文化ゼミの門をたたいた。以下は不安でいっぱい初参加者が文化ゼミの日々をいかに過ごし、何を感じたかを綴った体験記のようなものである。この文章がこれから新たに文化ゼミに参加する人たちの胸を少しでも軽くすることができれば幸いである。

全 4 泊 5 日間のプログラムは、ゴイレン先生による 3 回の講演と、参加者による講演および発表、グループディスカッション、その他（映画鑑賞等）で構成されていた。今回の文化ゼミ全体を統括するテーマは「自然のかたち、文化のかたち (Formen der Natur — Formen der Kultur)」である。まずゼミ初日には、ゴイレン先生より全体テーマへの導入として「形態学と対象的思考」の講演がなされた。この講演においては、形態学と文学との関係が、ゲーテの「今ここにはないものを見る力」に着目しつつ探られ、最終的には当時登場した光学機器、万華鏡と、ゲーテの自然研究の断片的なメモの形式を重ね合わせることによって明らかにされた。そうした当時のメディアとの紐づけにももちろん興味を惹かれたが、自然と芸術の関係についてゲーテ自身が直接言及したテキストとは距離を取り、彼の短いテキスト、齧歯類についての考察から形態学の本質を暴き出すその手法に、私は感銘を覚えた。質疑応答も盛り上がり、一日目は滞りなく終了した。

こう書くと、私は文化ゼミの一員として立派に参加し、講演の内容も完璧に咀嚼したかのように思われるが、事実はその真逆である。一日目の講演が終わった時、私の頭にまず浮かんだ言葉、それは「撤退」の二文字である。講演も質疑応答も、理解するには私にはレベルが高すぎる、というのが率直な感想であった。

そのように沈みこんでいるうちに若手の研究者の方たちに声を掛けられた。夕飯に誘われ、せっかく来たのだから落ち込んで帰るのはもったいないと思い、日吉にある慶應生行きつけの中華料理屋に入った。青菜炒めに麻婆豆腐、点心に油淋鶏とどれも美味で、まったく鉄観音茶を飲んでいる間に、沈み込んだ気持ちは徐々に癒され回復した。そしてそれぞれの研究や留学の話、たわいもない雑談でも盛り上がり、みな時を忘れて楽しく過ごした。解散するころには、私の気も少し晴れ、もう少し頑張ってみようという気持ちが芽生えた。

2 日目以降のグループディスカッションでは、各 10 人程度のグループに分かれ、近代から現代まで多様なジャンルのテキストを元に意見が交わされる。ここでは、私が参加したなかで印象深い議論をいくつか取り上げたい。

まず 3 日目に参加したヘルダーの『シェイクスピア』についてのグループディスカッションでは、「自然」とはその時代やその地域の「文化」に基づいているというヘルダー独自の自然と文化の関係を確認しつつ、ヘルダーが述べる「自然」、そして自然と「天才」の関係が焦点となり、白熱した議論が交わされた。他の参加者の方々は誰かの疑問・意見に応える形で自分の見解を述べ、臨機応変でありつつ本質的な議論を展開していたが、私は自分からあらかじめ考えて用意した意見を述べるタイミングを探るのに精一杯であった。それでも多少なりとも議論に参加できた気がしてひそかな喜びを覚えた。

そして 4 日目に参加したシュティフター『水晶』では、今回のテーマである「自然と文化」の関係が最も強く表出した。本作には商業・工業を営み、人が住まう村の領域と、二つの村の間にそびえる山という自然の領域が描かれる。しかし両者は分断されているようで、その境界線は曖昧である。村人は山から水の恵みを受け、登山靴を売って生業にする者もいる。生活の基盤には自然が存在し、描かれるのは両者の境界ではなく、その折り重なるところであるようにも思われる。また、本作においては科学的現象としての自然とキリスト教的意味を帯びた自然が二重に描かれている点も指摘された。私にはすべての議論が理解できたわけではないが、それでも一つの作品からさまざまな議論が生じ、反射していく様を目の当たりにするのは楽しかった（そしておずおずと極めて素朴な質問をする私を周囲の人は温かく受け入れてくれた）。

活発な議論が繰り広げられた本ゼミナールであるが、何よりの収穫であったのは、全国各地から集まる研究者の方々と交流を深められたことである。これまでも学外の学会・ゼミに参加したことはあったが、今回ほど同世代の研究者が一堂にそろう機会はなかった。ドイツ語で発表し、積極的に議論・質疑を行う先輩研究者の姿を見て、私は自分の力不足を痛感するとともに、こうなりたい、という目標を見つけることができた。また、新型コロナウイルスの影響でオンラインでしか会ったことのない方とも初めて対面することができたうえに、休み時間にも参加者と議論・質問を行うことが気軽にでき、このようなイベントが会場で開催されることのメリットを改めて感じた。文化ゼミで過ごした時間は、普段一人で本を読み、パソコンに向かい合っているだけの日々ではなかなか味わえない充実したものであった。

余談だが、この文化ゼミナールの途中で私は誕生日を迎え、24 歳になった。私の研究対象である作家、ゲオルク・ビューヒナーは 23 歳で生涯を終えたため、これで彼の年齢を追い越したことになる。彼は短い生涯のなかで革命活動に心血を注ぎ、比較解剖学を修め博士号を取得し、ドイツ文学の金字塔となる 4 つの作品を残した。私はといえば、比べること自

体おこがましいとはいえ、まだ修論を書き上げたばかりで語学も堪能とは言い難い凡人である。しかし、ドイツ語を話すことに恐怖を覚えていた私が、このようなゼミナールに参加し、そこでわずかながらいくつか発言をしたことは小さくとも、確かな一歩である。

最後に、初参加者である私に、このようなコラムを執筆する機会を与えてくださった文化ゼミナール実行委員・理事の皆様はこの場を借りて心より感謝申し上げます。

森野 紗英（早稲田大学博士課程）

0201

作成日：2024/07/20